

九州方言敬讓・希求助動詞活用分布相

吉町, 義雄

<https://doi.org/10.15017/2332947>

出版情報 : 文學研究. 41, pp.55-98, 1951-03-10. 九州文学会
バージョン :
権利関係 :

九州方言敬讓・希求助動詞活用分布相

吉 町 義 雄

- 一 九州方言敬讓助動詞活用分布相
- 二 九州方言助動詞「マス」分布相
- 三 九州方言希求「下サイ」分布相

一

『口語法調査報告書』第二十條は「御覽ナサル」「御聞キ下サル」などの「ナサル」「下サル」の活用（四段に連用下二段を混用）如何、又連用に「ナサツテ」「クダサツテ」等を用ゐるか、又命令に「ナサイ」「クダサイ」又は「ナサレイ」「クダサレイ」を用ゐるかに就ての回答であり、第一問は東北九州以外は全国的に肯定され、第二は九州以外は全国的に肯定され、第三は中部・近畿・中国の一部以外はイを添へぬと結論出来るが、是は語尾発音よりも表現語彙の問題に興味がある。全国的に大体「下サイ」系が支配してゐて、「御覽」系が所々に、「遣ワサイ」系が岡山・

福岡に、「呉レ」系が北九州や宮崎に、「仰付ケラレ」系が福岡に見える位で不完全なものである。

『口語法分布図』第廿四「「なされた」「なさった」「なすった」等ノ分布図」は専用五、並用十、そして此の語を用ひざる地方と報告不明不着地方とに分けてある。「ナサレタ」(縁)は山口全部、富山・福井・香川・島根・佐賀・宮崎一部、「ナサッタ」(黄)は栃木・神奈川全部、福井・富山・愛媛・福岡・長崎一部、「ナスッタ」「ナスタ」(赤縦線)は宮城全部、「ナハレタ」(青横線)は福井一部、「ナハッタ」(青)は熊本全部、京都一部、「ナサレタ」「ナサッタ」並用(黄地青横線)は全国的(北九州も)、此の語を用ひざる地方(青縦線)は岩手・福島・鹿児島等になつてゐる。

報告書第廿一條は「ナサリマス」「ゴザリマス」等の「マス」は下二段と四段との活用を混用してあるが、連体終止、已然と命令の各二様の活用は何れを用ひてあるか、又命令には「マセイ」とイを添へるかに就ての回答が載せてあり、是に由ると混用は全国的であるが、連体終止は「マス」、已然は「マスレバ」「マスリヤ」、命令は東日本は「マシ」西日本は「マセ」(イを附けない)が普通となつてゐる。そして九州は他と異なる様相を表してをり、豊日地方は標準的であるが、肥筑(宮崎縣西臼杵郡も)は將然「マッセン」、連体終止「マッス(ツ)」, 已然「マッスルバ」、命令「マッセ」、未来「マッショ」となつてをり、更に熊本は球磨郡のみは「モーサン」「モーシテ」「モース」「モーセバ」「モーセ」「モーソー」を、鹿児島(及び宮崎縣諸縣郡)は「モス」を用ひてゐる事が解る。

分布図第廿五「「なされます」「なさります」「なさいます」等ノ分布図」は「ナサリマス」(青縦線)は宮城・栃木全部、青森・福井・福岡一部、「ナサレマス」(青横線)は秋田・大分全部、山形・新潟・愛媛一部、「ナサイマス」

(縁)は神奈川・高知全部、島根・佐賀一部、「ナサリマス」「ナサレタイ」(青)は関東・中部・近畿・中国大部分、岩手・香川全部、愛媛・福岡・長崎一部、「ナサイマス」「ナサレタイ」(黄地青横線)は新潟・愛知・和歌山・愛媛・福岡一部、「ナハリマス」(黄)は徳島・熊本全部、京都・和歌山一部、此の語を用ひぬ地方(青点線)は福島・鹿児島・宮崎である。

報告書第廿二條は「入ラッシュナル」等の活用如何(良行四段式か)、尙連用形は「入ラッシュヤッタ」等か、命令は「入ラッシュヤイ」かに就ての回答であり、是に由ると大体東日本は質問を肯定してをり、西日本は本来此の語を用いぬ事が解る。

『口語法別記』には敬讓の助動詞五種「動作を敬つて云うもの」の内に、受身の「れる」「られる」と使役の「せられる」「させられる」又それを約めて少し敬意の薄いだ「しやる」「さつしやる」を指摘してあるが、凡て地方様相には觸れてない。

『九州方言調査表』9頁助動詞第五欄上に

ナサルと云ふか、ナザルと云ふか、

ナハルと云ふか、ガツシャルと云ふか。

と刷込んだに對する回答は別表1右半の通り。熊本の「ナハル」以外は九州の「ナサル」が代表的となる。

同9頁第三欄上に

九州方言敬讓・希求助動詞活用分布相

ゴザル・ゴザス(ゴアスやゴワス)を用ふるや。

ヤル・ヤスを用ふるや。

と刷込んだに對する回答は別表1左半の通り。此の内「ゴザル」動詞連用形に、「ゴザス」は名詞に接続するから、別表は使用度数として比較対照す可きでない。

同9頁第四欄上に

オヂヤルやオサイヂヤルや、

タモルやギヤルを用ふるや。

と刷込んだに對する回答は別表3の通り。是は鹿語圏内のみの様相だが、「ール」系よりも「ース」系が優勢である事が解る。

右に於て尙次の様な訛形が報告された。

○オサイセズ宮1(諸) オサイヂヤンス鹿2(薩) オヂヤンス鹿1(薩) チヤス鹿4(薩2隅2)

○ガアス福2(後) ガス長8熊2大1(後) ガスー長1 ガンス熊2 ガツシユ熊1

○ゴサル福2(前1後1) 2大1(前) ゴサス福2(前) ゴザアッス佐1 ゴザー佐1 ゴザンスル長3大5
(後2前3) ゴザンスツ佐7 ゴザンス福4(豊) 佐2熊5鹿3(薩) 宮6(諸2日4) 大5(前4前1) ゴザ

ツス佐1 ゴザアッス佐1 ゴゼンス宮1(諸) ゴゼス宮1(諸) グザンス熊1

○ゴワンス宮1(諸) グワス宮3(諸2日1)

○ゴンスル長1 ゴンスル長2 ゴンスル長1

○シヤル鹿7 (薩4 隅3) 宮6 (諸3 日3) サツシヤル長1 サツシヤル長1 (老) 熊2 行カッシヤル熊1 勉

強セラッシヤル福2 (後) ●シヤイ鹿2 (薩1 隅1) 宮1 (諸) シヤス鹿5 (薩3 隅2) 宮1 (諸) シヤッ鹿7

(薩4 隅3) シアス鹿1 (大)

○サル熊1 シンサル長1 サス熊1

○ナサス鹿1 (薩) ナザル・ンザル福2 (博多) 佐1 ナシヤル福1 (前) ンシヤル福1 (前)

○ナアル福1 (前) ナアス福1 (前) ナワル佐1 ナル福2 (前) 長1 熊3 ナス福1 (前) 長1

茶刷補遺質問表に

八 例へば「帰つて御座る」と云ふ可き時 帰り御座ル の如く テ を略す傾向がありませうか。
としたに對する回答左の通り。

【福】 糟1 宗1 鞍1 嘉1 糸3 筑2 福2 幡1 若1

漕1

【佐】 佐1 三1 杵1

【長】 北高1 西彼1 北松1

【熊】 鹿1 上1 下1 天1 熊1

【鹿】 日1 鹿1

始 1 肝 1

【宮】 北諸 1 都 1

同回答表に

八 又例へば 壺田御座ス 等の如く デ を省略して云ふ傾向がありますか。
と刷込んだに對する回答次の通り。

【福】 糟 1 鞍 1 糸 1 筑 1

【長】 東彼 1 北松 1

【鹿】 出 1 薩 1 日 1 鹿 1

始 1 嚙 1 肝 1

【宮】 北諸 1 西諸 1 都 1

黒刷第二回補遺回答表に

九 敬讓助動詞を 受ケラス 見ラス 来^コラス 為^セラス と言ひますか。

十 敬讓助動詞を 行キナル 見ナル 来^キナル 為^シナル と言ひますか。

十一 敬讓助動詞を 書キナス 見ナス 来^キナス 為^シナス と言ひますか。

と刷込んだに對する回答は別表 2 右半の通り。「ラス」は西九州、「ナル」は筑前と佐賀・宮崎に著しい。

茶刷補遺回答表に

一 暑ウ・ガ) ッシエン
 出シ・ヤ) ッシエン
 ヤ)ガ) ッシヨ
 ヤ)ガ) シタ
 ヤ)ガ) ス
 ヤ)ガ) ッスリヤ
 ヤ)ガ) ッシエイ

否 定

○ガッセン福7 (前5後2) 佐1長9熊8宮2 (日) ガッセン佐2長1 ガンサン熊1 ガンシエン長1大2
 (後) ガンヘン長1

○ヤッセン福4 (前2後1) 長1熊8宮2 (日) ヤセン長1 ヤンセン (ヤンシエン) 福2 (後) 佐1長4宮1
 (日) 大11 (後9前2) ヤンヘン長2

未 來

○ガッシー福8 (前7後1) 佐3長8熊4鹿1 (隅) 宮1 (日) 大1 (前) ガンシシー福2 (後) 長2宮2 (日)
 大2 (後1前1) ガンソウ熊2

○ヤッシー長1熊3宮2 (日) ヤシー長1 ヤンシシー福1 (後) 佐1 ヤンヒヨ長1
 連 用

○ガシタ福10 (豊1前7後2) 佐3長11熊5鹿3 (薩1隅2) 宮4 (諸2日2) 大3 (後2前1) ガンシタ福2 (後)
 熊2

連体・終止

○ガス福8 (豊1前7) 佐3長11熊6鹿4 (薩1隅3) 宮6 (諸3日3) 大2 (前) ガンス福2 (後) 熊2

○ヤス長8熊8鹿1 (隅) 宮1 (日) ヤース長1 ヤンス(ル) 宮2 (諸1日1) 大4 (後3前1)

已 然

○ガツスリヤ福6 (前5後1) 佐2熊3大1 (前) ガンスリヤ福1 (後) 熊1大1 (後)

○ヤツスリヤ長1熊2 ヤンスリヤ福2 (後) 宮2 (日) 大7 (後5前2)

命令

○ガツシエイ福2 (前) 鹿1 (隅) ガツシエー長1 ガツシエ熊1

○ヤツシエ長1 ヤンシエイ宮1 (日) 大2 (後) ヤンセー大1 (後) ヤンセ長1 ヤンシー大1 (後) ヤン

シイ大2 (後)

尙「ゴワス」「ゴザス」等と書いて来たのは捨てる。右の概略活用形を纏めたのが別表2左半である。「ヤンス」系が大分縣に著しい事が解る。

又「持ツテハル」等の語法も特徴とならう。

註 別表1

「ゴザス」は肥後地方では「ゴザッセン」「ゴザッシユ(一)」「ゴザッシャー」となるのが普通。

「ガツシヤル」福岡市三、「ナハル」(博多)

ガツシヤル(福岡)福岡市一、「ナザル」(博多)

ガツシヤル(福

岡「福岡市」。

長崎縣南高来郡加津佐町「ヤスマミヤ」ヤンヒョーヤシタヤスマンヘ、宮崎縣東臼杵郡細島町「ヤンセンヤンシヨヤンス」。

別表2 「ラス」は全部でなく一部使用のものも算入した。「ナル」は「ナツ」、「ナス」は「ナース」とせるもの極少数あり。尙「ーンシヤル」とせるもの長一。

「ヤツセン ヤツシヨ」ヤシタヤスマヤツスリヤ「ヤンセン ヤンシヨ」ヤンシタヤンスヤンスリヤ」と全部活用するものは無いと言つてよい。是に近いもの熊入は悉く天草郡。長二(肥前部)は未然「ヤンヘン」、内一は更に「ヤンヒョー」。長崎縣南高来郡守山村「持チヤセン ヤシヨ」ヤシタヤスマヤンセ」。

ロドリゲス長崎版『日本文典』慶長九—一三年の卷二なる一六九丁ウには豊後で「御参リアル」「参ラルル」の代りに「参リシヤル」「説ミシヤッタ」等と言つた記述が見える。

松下大三郎博士『改撰標準日本文法』昭和三年四月や『標準日本口語法』昭和五年二月では「ござんす」は「ます」「です」と共に特別サ行変格として扱つてある。

原田芳起氏「九州方言雑考」(四)(昭和六年八月『熊本教育』第二五八号)では文部省口語法調査報告書を檢して53頁下「かくてみると報告が見当違ひでよく判らぬが九州方言に於ける(此所ニ)おいでになる(此所ニ)おいでなるの意のいらつしやいに当る語は、ござる系とおちやる系と二分されるかと思ふ。」同「鹿児島方言の敬語法に就きて」(昭和九年三月『方言』第四卷第三号)に依ると「オサイヂヤル」「オサイヂヤス」は「オヂヤル」「オヂヤス」より丁寧なりとしてある。

永田吉太郎「*「おぢます」の variety*」(昭和八年五月・九月『音声学協会々報』第29—30・31号)や同「方言語法の問題」(三)——敬語助動詞ナサル——(昭和八年八月『方言』第三卷第八号)参照。

九州方言敬讓・希求助動詞活用分布相

湯沢幸吉郎教授「敬語助動詞「せ（させ）らる」の徳川期に於ける所遷と「やんす」「やす」の本源」（昭和八年六月『国語と国文学』第十卷第六号、同十八年一月『国語史概説』所收）では「やんす」「やす」の起源は共に「あります」であるとして、秋田方言にも現用されるとしてある。尙同『徳川時代言語の研究』昭和十一年九月や同『国語史—近世篇』同十二年三月の關係箇所参照。

斎藤俊三氏「肥後方言の助動詞に就きて」（昭和九年七月『国語教育』第十七卷第七号）には特に敬讓法の詳しい報告がある。三ヶ尻浩氏「敬語法小論（助動詞を主として）」（昭和十年三月『国語・国文』第五卷第参号）四「敬語助動詞「す」の今昔」に於て朝鮮語の si と共通根源の本語を国語史上に局限して消長を考へ、肥筑方言实例「行かす」「来らす」等に即して九五頁「然らば、之を上古の【佐行四段敬語助動詞】「す」そのままの残存かと云ふに、決して然らず、どうしても、中古の【動詞と融合又は下二段助動詞】「す」「さす」を経過して来たものと考へられ、それが四段活用復興の潮流に乗つて、上記の如く、正確な四段を取るに至つたのではあるまいか。「中略」この「す」の起源は、上古に求めらるべきでなく、実は近世に存するかと思はれる。」

昭和十年五月『音声学協会々報』第36号「コトタマ往来」232「中流階級に於て妻が夫の事を人に向つて言ふ時、関東では尊称は示さないが、関西では是を示すに自己の方言もてする時は極めて自然に聞えるが、標準語もて

今外へ出とられます。

の如き言ひ方をよくするのは滑稽ではあるまいか。」同十二年五月第47号同761「関西の婦人が夫の行動を噂して他人に語る時、敬語を用ふるのは（但し方言的の「行きやはる」等でなく、標準語的「行かれます」等と言ふ）、『国語と国文学』第十四卷第二号（昭和十二年五月）の岩淵悦太郎氏「敬語の一種のつかひ方」を見ると、由緒の古い事が解る。」（吉町）岩淵氏によると此の敬語法用例は狂言記や博多仁和加脚本集に散見するのである。

金尾宗平教授『風土と生活 福岡縣地誌』昭和十年八月の後編「地方誌」二八一頁では福岡市の方言に三部あるとして一例を

標準語 おいでなさい。どうしてみられますか。

博多語 きなさつせ。どげんしよんなざるな。

福岡部 きなさつせ。どげんしよんなざるな。

春日部 おいでない。どげんしがつしやるな。

で示してある。

国語教育会『現代語の諸相』昭和十八年六月の今泉忠義教授「現代の敬語」二六四頁「熊本市に生れて小学校の中途から和歌山に移住して、如何に敬語の少いかに驚いたといふ人の話も聞いた。「中略」東京語は敬語、殊に婦人の丁寧語は随分盛であるが、どうかすると一般日常語に於ての尊敬語には、私など三州産のものにも一寸不満足に思はれるやうな言ひ方を耳にすることがある。」

藤原与一博士「国語の尊敬表現」昭和十九年二月『方言研究』第九輯）4頁「四国は「れる」敬語の先づ無い所と言へるが、転じて中国に渡ると、山陽側は注意すべき「れる」言葉の地帯なのである。それは、九州の「れる」語法が残存の傾向をとつてゐるのに対して、活潑な現代の表現法をなしてゐる。」7頁「しやる・さつしやる」語法に就いては、これが、南は九州より北は主として北陸添ひに奥羽まで、大略全国に亘つて存在するの拘らず、今日もはや老人語の世界に属し、一般には、或は中年以下の現代人からは、概して中等以下のものと見られつゝあるのが注目を引く。分布上、九州よりは山陰の出雲地方が之を日常用語として活用することが著しい。次いで山陰略と相通ふ所の濃厚な加賀越中地方が同じく之をよく遣ふ。」9頁「なざる」が「ナル」や「ナス」になつた形は九州に多く、四国にも無いことはないが、それよりも中国筋に多く見出される。」11頁「「お見ある」等の「ある」は、「中略」「やる」語法として今は主に九州南方に多く行はれてゐるが、これが右の「ます」と熟合した「やんす・やす」言葉は、別して薩摩、大隅に著しく、通常「やる」言葉の上に位して、最高の敬語法になることが多い。「やんす・やす」は中国以東にも東北に至るまで処々に見出されはするが、九州ほどではなく」12頁「さうして、肥

と刷込んだに對する回答模様は次の通り。

否 定

○マッセン

【福】 築1

糟2 宗2 遠2 鞍1 嘉5 朝6 糸7 筑3 福3 幡1 若1 直1

井5 瀧4 女4 山2・池3 牟2

【佐】 佐郡1 三2 東松2 杵3 藤1 佐市1 唐1

【長】 北高3 南高1 東彼5 西彼9 北松6 世1

巻3

【熊】 玉8 鹿6 菊6 阿4 上益6 下益2 飽3 宇3 代3 球1 蘆2 天8 熊2

【宮】 西白2

○マセン

【福】 企1 田2 京1 築4 倉3 門1

遠1 鞍1 嘉1 朝1 糸1 早1 筑2 福2 幡1 若1

九州方言敬讓・希求助動詞活用分布相

井 2 瀨 1

【佐】 佐郡 1 神 1 三 1 東松 1 杵 2 佐市 1 唐 2

【長】 北高 3 南高 2 東彼 2 西彼 3 北松 2 南松 2 世 1

下 2

【熊】 玉 2 鹿 1 菊 2 上益 1 下益 1 字 1 天 1

【宮】 南 2 宮郡 1 児 3 東白 2

【大】 南海 3 北海 3 分郡 3 速 3 東国 3 西国 3 野 3 直 9 玖 4 日 4 分市 2 別 1

字 3 毛 4

○モ一サン

【長】 西彼 1

【熊】 球 4

【鹿】 薩 1 鹿市 2

始 3 嚙 2 肝 1 熊種 1 島 4

【宮】 西諸 1

○モサン

【鹿】 薩 2 島 1 出 1 置 3 川 2

始³ 贈² 肝⁴

【宮】 北諸³ 西諸¹ 東諸¹ 都³

児¹

○モハン

【鹿】 川¹ 鹿市¹

始³ 贈¹ 肝¹ 島¹

【宮】 北諸¹

未 然

○マツシヨ一(処々で マツシユ一)

【福】 築¹

糟² 宗² 遠¹ 鞍¹ 嘉⁵ 朝⁵ 糸⁶ 筑² 福² 幡¹ 若¹ 直¹

井⁵ 瀦³ 女⁴ 山² 池³ 牟²

【佐】 佐郡¹ 三² 東松² 杵³ 藤¹ 佐市¹ 唐¹

【長】 北高³ 東杵⁴ 西彼⁸ 北松⁵ 世¹

老³

【熊】 玉⁸ 鹿⁶ 菊⁵ 阿³ 上益⁶ 下益² 飽³ 宇³ 代² 球¹ 蘆² 天⁶ 熊²

【宮】 西臼 2

○マシヨ一(処々で マシヨ マシユ一)

【福】 企 1 田 2 京 1 築 4 倉 2 門 1

遠 1 鞍 1 嘉 1 朝 2 糸 2 早 1 筑 3 福 2 幡 2 若 1

井 2. 瀧 1

【佐】 佐郡 1 神 1 三 1 東松 1 杵 1 佐市 1 唐 2

【長】 北高 4 南高 2 東彼 3 西彼 3 北松 3 南松 2 世 1

下 4

【熊】 玉 1 鹿 1 菊 3 阿 1 下益 1 宇 1 天 2

【宮】 南 2 官郡 1 児 3 東臼 2 西臼 1

【大】 南海 3 北海 3 分郡 3 速 4 東国 3 西国 3 野 3 直 8 玖 4 日 4 分市 2 別 1

宇 3 毛 4

○モ一ソ一

【長】 西彼 1

【熊】 球 4

【鹿】 薩 1 鹿市 2

始3 嚙1 肝1 熊種1 島4

【宮】 西諸1

○モノ(又は モノー モソウ)

【鹿】 出2 島1 薩2 日3 川4 鹿市1

始4 嚙3 肝5

【宮】 北諸2 西諸1 東諸1 都3

児1

連体・終止

○マツスル(処々で マツスツ マツス)

【福】 築1

遠2 嘉3 幡1 若1

井4 瀧2 山2 池3 牟2

【佐】 三1 東松1 杵1 藤1 佐市1

【長】 北高1 北松4 世1

巻3

【熊】 玉1 鹿2 字1 蘆1 天1

九州方言敬讓・希求助動詞活用分布相

【宮】 西臼 1

○マス(処々で マスル)

【福】 企 1 田 2 京 1 築 4 倉 4

糟 2 宗 2 遠 2 鞍 1 嘉 3 朝 6 糸 7 早 1 筑 4 福 4 幡 2 若 1 直 1

井 3 瀧 2 女 4 山 1

【佐】 佐郡 1 神 1 三 2 東松 1 杵 1 佐郡 1 唐 2

【長】 北高 6 南高 2 東彼 7 西彼 8 北松 4 南松 2 世 1

老 2 下 4

【熊】 玉 7 鹿 5 菊 6 阿 4 上益 6 下益 2 飽 3 字 3 代 3 球 1 蘆 1 天 6 熊 2

【宮】 南 3 宮郡 1 児 3 東臼 2 西臼 2

【大】 南海 3 北海 3 分郡 3 速 4 東国 3 西国 3 野 4 直 9 玖 5 日 4 分市 2 別 1

字 3 毛 5

○モース

【長】 西彼 1

【熊】 球 4

【鹿】 薩 1 鹿市 2

始3 贈1 肝1 熊_子種1 島4

【宮】西諸1

○モス

【鹿】出1 薩_島3 甑1 日3 川1 鹿市1

始4 贈1 肝4

【宮】北諸2 西諸1 東諸1 都3

児1

巳 然

○マツスリヤ(処々で マツスレバ マツシヤ)

【福】築1

糟1 遠1 鞍2 嘉1 朝4 糸2 筑1 福1 幡1 若1

井5 瀧3 女3 山1 池1 牟2

【佐】佐郡1 三2 東松1 杵2 佐市1

【長】北松2 世1

巻3

【熊】玉2 鹿3 菊3 阿1 上益1 下益1 飽1 宇1 代1 蘆1 天3

九州方言敬讓・希求助動詞活用分布相

【宮】 西臼2

○マスリヤ(処々で マスレバ マシヤ)

【福】 企1 田2 京1 築4 倉3 門1

糟1 宗2 遠1 鞍1 嘉4 朝2 糸4 早1 筑1 福3 幡2 若1

井2 瀦1

【佐】 佐郡1 神1 三1 東松1 杵1 佐市2 唐1

【長】 北高4 南高2 東彼5 西彼4 北松1 南松2 世1

下3

【熊】 玉2 鹿2 菊3 阿1 上益3 下益1 飽2 宇2 代2 蘆1 天3 熊2

【宮】 南1 宮郡1 児3 東臼2

【大】 南海3 北海3 分郡3 速3 東国3 西国3 野3 直8 玖4 日4 分市2 別1

字3 毛4

○モリスリヤ(処々で モンセバ) 連体終止形
モスリヤ(処々で モセバ) 地点大部分

命 令

○マツセイ(処々で マツセイ マツセ)

【福】 企 1 築 1

遠 1 嘉 2 朝 1 糸 3 筑 1 福 2 幡 1 若 1

井 2 瀧 1 女 2 池 1 牟 2

【佐】 佐郡 1 三 1 東松 2 杵 1 藤 1 佐 1 唐 1

【長】 北高 2 東彼 5 西彼 6 北松 4 世 1

巻 3

【熊】 玉 4 鹿 4 菊 4 阿 1 上益 1 下益 2 飽 1 宇 3 代 1 蘆 1 天 3 熊 2

○マセ(処々で マセ)

【福】 企 1 田 2 京 1 築 3 倉 2 門 1

朝 1 筑 1 福 1 幡 1 若 1

井 1 瀧 1

【佐】 佐郡 1 神 1 東松 1 佐市 1 唐 1

【長】 北高 2 南高 2 東彼 1 北松 2

下 4

【熊】 玉 1 鹿 1 菊 1 上益 1 飽 1 天 1

【宮】 南 2 児 3 東白 1

【大】 南海3 北海2 分郡3 速3 東國2 西國3 野3 直5 玖4 日3 分市2

宇2 毛2

○マッシー

【宮】 西白1

○マシイ

【大】 直2

○モーセ

【長】 西彼1

【熊】 球2

【鹿】 鹿市2

始1 肝1 熊種子1 島3

【宮】 北諸1 西諸1

○モセ (処々で モンセ)

【鹿】 出1 日1 川1 鹿市1

始2 肝1

【宮】 東諸1

以上を活用に即して整理したのが別表5である。是と別表4とを睨み合はせると

マツセン マツスル マツスリヤ——筑後、北部肥前、壹岐

マツセン マス マツスリヤ——筑前、筑後、肥後

マツセン マス マスリヤ——筑前、南部肥前、肥後

マセン マス マスリヤ——豊前、豊後、筑前、日向【三諸縣郡】、對馬

モーサン モース モースリヤ——肥後南部、大隅、豊後

モサン モス モスリヤ——薩摩、大隅、日向南部

とならうが、各地方に即する特色は

筑前——否定未然以外は新形「マス」が主要であり、連体終止以外は古形のもが是に次ぐ。

筑後——全活用古形「マツスル」が圧倒的。

肥前——全活用古形「マツスル」のもが支配的だが、更に南部は否定未然以外新形「マス」も旺である。

肥後——連体終止以外は古形のもが圧倒的だが、全活用古形「マツスル」も勢力がある。

薩摩——「モス」が独占する。

大隅——薩摩と同様、但し島嶼部は「モース」。

日向——全活用新形「マス」が支配する。

豊後——日向と同様。

豊前——豊後と同様。

壱岐——筑後と同様。

対馬——豊日と同様。

かくて中央的の新形「マス」と古形「マッスル」とそして辺境的の別系「モース」とは九州島を斜に割つて鼎立してをり、国語近世三百年史を水平に示してゐる事になる。而も語彙としては最古形たる「モース」も活用から見れば四段であり、此の点は「マス」よりも新形に徹してゐる。

調査表 9 頁助動詞第七欄上に

マラスルやメーラスル（動詞としてでも可）等のある場合はその用例差異を略記され度し。

と刷込んだに對する回答模様左の如し。

○「用ひず」「なし」「不明」等とせるもの×や/線で消したもの 福60（豊20前29後11）佐30長41（36巻2対3）熊53鹿22（薩15隅7）宮15（諸6日9）大33（後30前3）

○「用ふ」「あり」 福2（豊1後1）

○「マラスルなし」 佐1鹿1（隅）大1（後）「メーラス（ル）なし」 熊6宮1（諸）大1（後）

○「アゲル」「ヤル」意 佐1長1鹿7（薩5隅2）宮2（諸）

- 質問を誤解したもの。小便マラスル福20 (豊1前4後15) 佐3長3 (1巻1対1) 熊8大8 (後) 糞マラスル大1 (後) 謝ラスル熊1 困ラスル福1 (豊) 熊2 水ヲタマラスル宮1 (日) 止マラスル福1 (前) 宮1 (諸)
- 泊マラスル宮1 (日) 大1 (後) 閉デマラスル宮1 (日) 「寺」「お宮」「神様」等に参らざる福27 (豊5後22) 佐3長12 (9巻1対2) 熊9鹿4 (薩2隅2) 宮2 (諸1日1) 大25 (後15前10) 降参させる福1 (豊) 拳骨ヲメーラスル大1 (後) 帰ラスル大2 (後) 会ユトシマラスヤ (会を成立させようや) 会ヤトシマランナツタ鹿1 (薩) 播イタ福2 (後) バル福1 (前)
- 意味に関係なく外形のみもの マラスル福1 (後) 佐1熊2鹿1 (隅) 大2 (後) マイラスル福1 (前) 大1 (後) マエーラスル宮1 (日) マエラス宮1 (日) ミヤーラス (ル) 佐3長2熊2 ミヤーラスル熊2 ミヤーラス熊1 ミヤアーラスル熊2 ミヤラスル佐1 ミヤラスル熊1 ミヤースル熊1 メヤーラスル長1 メヤラス長1 メーラスル福23 (豊5後18) 長8 (4巻2対2) 熊3鹿3 (薩1隅2) 宮1 (日) 大32 (後22前10) メーラス福2 (後) 熊1 メエーラスル福1 (後) メースル鹿1 (薩) メラスル鹿2 (薩) 宮4 (諸2日2) メラスイ鹿2 (大) メラスイ鹿1 (薩)
- 活用を書いて来たもの 「マラセン マラシユー マラセマス マラスリヤ マラセロ」 「メーラセン メーラシユー メーラセマス メーラスル メーラスレバ」 「メーラセロ」 「ミヤーラセン」 等 福4 (後) 佐2長1鹿2 (薩1隅1) 大3 (後)

註 別表4 命令形は大目に見てある。佐賀では已然形は「マッスギー」と連体形を用いる。「マンダ マッスレバ」は省く。

「マシヨール」マス マスリヤ」へは「マスマイ マシタ」とのみあるものも算入。麥格とすべきものは福一(豊)長一熊二。「マース」とのみあるもの福一(後)熊一大一(後)、「マッスー」とのみ佐一。

「モース」へは一部分のみ記入のものも算入した。内「モース」のみ福一(後)、「モース」のみ佐二長三(一對二)熊六鹿二(薩)宮一(日)大(一)前。「モス」も同前、「モソ」のみ長一、「モス」のみ熊一鹿一六(薩)一隅五)宮二(諸)。「モース」「モス」両用が宮一(諸)。

「マス」「モース」両用は別々に算入。宮崎縣東諸縣郡本庄町は両用だが「但し古くはマスを使用せざりしものと思ふ、明治以後頃か?」。

別表5、已然形缺のものは想定算入した。命令形は凡て大目に見てある。單に「マッセン」等としたものは純古形「マッスル マッスリヤ」へ算入。「マス」等としたものは純新形「マセン マスリヤ」へ算入。「マッセン マス マッスリヤ」へは否定形「マセン」未然形「マシヨール」も算入。「マッセン マス マスリヤ」へは否定形「マセン」未然形「マシヨール」も算入。「マッセン マス マスリヤ」へは否定形「マセン」未然形「マシヨール」も算入。否定形語尾「シェン」未然形語尾「ュー」終止形「マッス」已然形「レバ」「シヤ」となる所あり。

「モース」長一は西彼杵郡七釜村、熊四は悉く球磨郡、鹿一一は六が熊毛郡および大島郡、「モーンサン」等となるもの鹿兒島市一。「モハン」は否定形だけであつて他は「モース」と同活用。

長崎版『日本文典』一六三丁ウには「申す」は坂東では下賤な者共の間で、「下」では主として肥前、肥後、薩摩、日向等であるとする。の代りに盛に使はれてゐるが、甚だ下品な言ひ方としてゐる。

佐々政一博士『修辭法講話』大正六年七月初版の附録「書翰文概論」三五頁「この候が徳川期に至つてマスと変化する間に、恐らくは參らすといふ語が稍広く行はれたに相違ない。この參らすと並んで申すといふ語も、マスと同じ意味で行はれた事があつたかも知れぬ。その參らすがまらずとなり、更にますとなり、他面には申すがますとなり、二つの者がいつの間にか混同してしまつたのが、徳川期の普通の卑下の助動詞である。「中略」參らすを助動詞に用ひたのは大抵阿仏尼の時代(鎌倉初

期)が初であらうと云はれてゐる。」

前問恭作『龍歌故語箋』(大正十三年十一月)の「緒言」二頁「我国語の場合では立派な文芸などのあるせいでもあるか、語の保存力が強いやうで元龜元正頃のゼスキット宗徒の残した口語の記録は今読んで、我々の語と余り違はない、只、語尾「致シマウス」といつてゐる位が耳に立つに過ぎないが、朝鮮の諺文の古い記録を見るとこれとは趣を異にしてゐる。」

安田喜代門教授『国語法概説』昭和三年三月初版二一八—二二一頁には近代語助動詞マスの語源諸説を列挙批評し、マウス(申マス)(在りの敬語)説は活用形が何れも四段故到底問題にならない、従つてマキラス説は他よりも正しいとされてゐる。同『高等国語法』同四年十二月初版八九—九〇頁にも同様論証が見える。尙同「九州方言からの一視点」(昭和六年九月『国学院雑誌』第三十七卷第九号)ではマラスルやマツスルの古文獻例証と九州方言マツスルの活用分布が報告されてゐる。

春日政治博士『国語史上の一劃期』(昭和三年七月『日本文学講座』第十八卷、同改訂版第一卷同七年一月)や「敬讓助動詞マラスルについて」(昭和三年十二月『国語国文の研究』第二十七号、同『国語叢考』昭和二十二年九月初版所收)では給与を表す謙讓動詞「参ラス」から謙讓助動詞「マラス」へ更に「マス」への發達を説明され、「九州方言講座の後に」(日本放送協会九州支部『放送講演集・九州方言講座』昭和六年五月)では九州方言「マツスル」は両形の過渡殘存物である論証が見られるが、豊日マス地方・肥筑マツス地方・薩隅モス地方なる分布区劃論に於て国語調査委員会『口語法調査報告書』を全然無視されてゐるのは見落してゐる。尙同博士「甌島に遺れるマラスルとメラースル」(昭和六年十一月『九大国文学』第二号、同『国語叢考』所收)では該島同語は抄物に於けると同じく未だ丁寧助動詞の位置には成下らずマキラスルの原意に止つてゐる事、そしてマラスルは下二段から佐変への過渡期にあるがメラースルは更に佐変から四段化への段階にある事の報告。吉町調査では博多仁和加刊本九冊中にマツスルは明治三十五年本(編者熊本人)に只一箇拾へる。

湯沢幸吉郎教授「口語の「マス」の起源について」(昭和四年六月『教育』第五五六号、『国語学論考』昭和十五年二月所收)は今日のマスは書紀万葉以来のマスと室町期のマラスとから出ると云ふ二元説。同『室町時代の言語研究』昭和四年十二月以下論著關係箇所参照。

松下大三郎博士『標準日本語法』昭和五年二月一七四頁「「ます」の語源は古語の「座す」である。」として一七五頁では「参らす」説に反対してある。

吉沢義則博士『国語史概説』昭和六年二月初版の六「近代語の發達」二〇三頁「要するに、現在の謙讓語の「ます」は、「参らす」から出た「まらす」の變つたものであることは疑ひないけれど、果してその一元に帰せしめうるかどうかは疑問である。そこには文語の「ます」の血、「申す」の血も融け合つてゐると見るべきではあるまいかと思はれる。」

春日政治博士『小学方言講義 より』（昭和八年三月『文学研究』第四輯）二四頁「運用形だけはマシであつて、促音になつた例が見えない。元來この形はもとマセであつたのが早く變形したものであるから、それと共に促音も早くから失はれたものらしいのである。尙この運用形に注意すべき一つは、中止法の【例へば善行ガアラハレ】マシのあることである。これは江戸時代には中央にも存したのであるが、現代では一般に用ゐられず、無論福岡地方でも聞かない所である。」

原田芳起氏「天草島の方言に就て」（昭和九年九月『方言』第四卷第九号）では「マス」から出た「ヤス」（鹿語とは別系發達）を九州方言西部講成要素とする「マス」「ヤス」「モス」三系交錯を主張され、天草島は「ヤス」を用いるとしてある。

橋正一「助動詞『マス』の諸々相」（昭和十二年三月『国語教育』第二十二卷第三号）では姉妹語モウスには連体形と命令形とは使ふ事が無いとして七九頁「モサンは、モハンとも、ハンとも訛る。谷山町では、終止形をモスともモシともいひ、未來をモソともモンソともいふ。」八〇頁「春日政治博士は、対馬や大分縣には、マスの促音は無い様に言つて居られるが、実はあつてらしい。古い「風俗画報」に對馬のマソ（ませう）【吉町云、是は未然形ではなく、マスヨの訛形であつて今尙該島で用いてゐる】があり、近頃の大分縣立第一高女の「豊後方言集」第三輯にワカリマッセンがある。本州では、加賀能美郡にマッセ（ませ）、マッシン（ません）があり、四国では、高松市に「御怪我なさりますぜ」（御怪我なさりますよ）、阿波美馬郡に、「何の私がそんな嘘を言ひまっせ」（言ひませう）といふ言ひ方がある。」又マラスルの残存と思はれるものは日本海岸、特に北陸道にも多く見られる事が指摘されてゐる。そして八二頁「関東から信州にかけて、有リマシナイ、行キマシナイ

といふ打消の言ひ方がある。「中略」元來、打消の言ひ方は、西日本ではン、東日本ではナイであるから、マスの打消も、西日本のマセンに対して、東日本はマセナイ、又はマシナイであるべき筈である。東京でマセンといふのが、むしろ不思議である。」

昭和十四年一月『音声学協会々報』第55号「コトタマ往来」304(吉町)「『芸文』第拾參年第貳号(大正十一年二月)新村出博士「吉利支丹文学断片」に於ける佐行麥格敬讓助動詞「まらす」の誤字が春日政治博士に論はれ【昭和七年二月『九大文学』第三号の土井忠生博士「吉利支丹懺悔録の方言」で訂正された】、安田喜代門氏『高等口語法』九〇頁や木枝増一教授『高等口語法講義』(昭和六年五月)三一—二頁でも転載されてゐるのは兎も角、『大言海』第四卷(昭和十年九月【初版】)に迄下二段と誤載されてゐるのは少し酷い。」

中村通夫氏「であります言葉」(昭和十六年四月『国語研究』第九卷第四号、同『東京語の性格』昭和二十三年十一月所收)では、東京語で普通口語に用いない講演言葉、軍隊言葉たり男性専用語たる此の言ひ方は、江戸時代には用いられなかつたとする口語法別記の推測は誤であつて、遊里の寧ろ女性専用語であつた。そして明治初年から新造流行語ともなつた「であります調」は特に長州とは限定しなくても地方々言が旧來の江戸語に混同して形成されたと論証してある。

龜井孝氏「狂言ことば」(昭和十九年五月『能樂全書』第五卷)には「まらす」の新資料が見える。

日本語教育振興会『現代敬語法』昭和十九年六月の第十二章「敬語動詞の各説」(26)「ます」の語源二二—二四頁には(坐す・參らす・申す)が合流して出來たとしてある。

江湖山恒明氏「女性語「ぞます」考」(昭和十九年十月『橋本【進言】博士還曆記念國語学論集』)では「ござります」から転化した「ぞます」は天保頃から現れ、江戸遊里詞であり、現代インテリ女性の同形語も此の後裔で、オスも遊廓語とする。

柳田国男氏『毎日の言葉』昭和二十一年六月初版「モシモシ」三八頁「今日の敬語のマスなども、本来がマキラスだけからとは決していへません。久しくこの文句のしまひの【以下三九頁】申すを使つて居りますうちに、つまりは双方からの影響を

半々に受けたのであります。」同「ナルホド」四九頁「例へば此文章にも使つて居るマスなどが、申すとまゐらすとを混合して居るのも其一つの場合です。」

国語学会『国語の歴史』昭和二十三年十月の池上禎造氏「近世」一八一頁「末期の大阪にオマスは一般的で、やはりもとは遊里にあることを浪花聞書に指摘してゐるから江戸に使はれたかもしれない。京都でもオマスの使はれた形跡がある。」

上村孝二氏「薩隅方言問答」(昭和二十四年五月「鹿児島師範学校教育研究所紀要」第1号)1頁「客女の使う、コッチ来マスナヨ。ソナナ事シマスナなどのマスナの使い方はおかしいですね。主これは早くから注意して来たんですが、学校に行かない女の子まで使いますね、昔から「申言葉」だけ使かつていて、マスを珍らしく感じたのでしょうか。」

吉町居住隣室の松山生育博多辯三十歳女性は四国式にオデマスやお食ベマセなどと言ふ。

昭和二十四年十一月『国語学』第三輯の東條操氏の書評に榎垣実教授『京阪方言比較考』昭和二十三年五月謄写版が扱はれてあるが一〇五頁「ドスは「でおす」、ダスは「でやす」から出たものだらうと言ふ著者の説も注意すべきものだが、最近の若い人達にドス、ダスを使はない傾向があるといふ附記は、言葉の変遷が目前に起つてゐるものとして私を驚かした。即ち京都ではドス、大阪ではダスとデスを半々位に使ひ若き世代の人達はほとんどデスだけを使つてゐるとの事である。もつともデッシュャロ、デッセといふ促音形がある点で東京のデスとは同じでない。「中略」オスとオマスについては、著者は和歌山の「お早うオリマス」などの用法に考へて、オリマス→オマス→オスと変化したものと推定してゐる(オマス→オスの変化には多少の疑をのこして)。なほ、オマスは京都でも全く使はないわけでなく、使ふ時には多少強意の気味があり、使用度数は少い。これはオマスがオスの前身であることから考へられる。」

三

「下さい」に仰セツケマツセヤ遣ーサイ又は他のものを用ふれば例示され度し。

と刷込んだに對する回答模様左の通り。

○仰セツケラレマセ長1(對) 仰セツケラレ福1(後) 仰セツケマツセー長1 仰セツケマツセ熊1 仰セツケマツセ長1(羸) 仰セツケマツセー長1 仰セツケマツセ長4 仰シツケラリマツセー長1(羸) オシツケラレ福6(後) 佐1 オセツケマツセ長5 オスケラレ福1(後) オスケラレ福4(後) オスケー福1(後) オツケラレ福1(後)

○下サイ福2(前) 佐2長3(2對1) 熊4宮1(日) 大1(前) 下サリ大1(後) 下サリヤツセ長1 下サンシ宮1(諸) 下ツセー熊2 下ツセー熊1 下ツセ熊5 下ツセイ熊1 下ハイ熊1宮1(諸) 下ハイマツセ熊

2 下ハリ熊25宮3(諸1日2) 下ハリマツセ熊13 下ハリマツセ熊3 下ハンシ宮1(日) 下ハンシ宮1

(諸) 下ンシ宮1(日) 下ンセ熊1大3(後) 下リ熊2宮2(諸1日1) クダハリマツセー熊1 クダハレ福

6(後)長3 クダハンモンシ熊1 クダルマツセ熊1 クダツセ熊2 クダッセ熊2 クダイ熊8宮2(諸1日1)

クダーイ熊1 クダン大1(後) クダンシ熊2 クダンモーシ熊1 クツダシヤン長1 クザンセ大1(後) ク

ツヂヤンセ宮1(諸) クライ宮2(日) クランセ大1(後) オクダシ長1

○クレ福5(豊4前1) 熊3鹿4(薩2隅2) 宮1(諸) 大2(後) クレー福1(豊) 熊1鹿2(薩) 大2(後)

クレゴザイ長1 クレシ長1 クレナア大1(後) クレナー熊2大1(後) クレナイ福1(豊) 熊1大1(後)

クレナイへ長1 クレナサイ福7(前1後6) 佐3大1(後) クレナツセ長1熊6 クレナツセ熊1 クレナハイ

- 福1 (豊) 熊1 クレナハレ長1 クレナハルマツセ熊2 クレナへ長2 クレナンセ長4 クレナンへ長3 クレ
 ノイ熊1 クレハレ福1 (豊) クレマセ長1 (対) クレマセー大1 (後) クレマツセ長4 クレマツセー長
 2 クレマツセ福1 (前) クレメセ福2 (後) クレイイ鹿2 (薩1 隅1) クレヤレ鹿1 (薩) クレヤンモ
 シ熊1 クレレ長2 クレロ福1 (後) 佐2 長1 熊2 クレンカ福3 (豊1 後2) 長1 大1 (後) クレンカイ福2
 (後) 佐2 クレンカナ長2 クレンカン福3 (後) クレンカントー佐1 クレンカンモ福1 (後) クレンケー
 佐2 クレンデー長1 (老) クレンナ熊2 クレンナイ福1 (後) 長1 クレンナマイ長1 クレンナムシ長1
 クレンネ佐1 長1 クレンネー佐1 クレンノ福15 (後) クレンノー福7 (後) 長1 クレンヘー長1 クリ宮4
 (諸1 日3) クリー福2 (豊) クリイ福3 (豊) 大1 (前) クリヤイ宮1 (諸) クリヤレ熊1 クルマセ長
 1 (対) クイゴザイ佐7 長2 クイサイ佐4 クイダツシャイ佐1 呉イナイ長1 クイナイ佐2 長1 クイヤイ
 佐1 鹿15 (薩8 隅7) クイヤシ鹿3 (薩2 隅1) クイヤン鹿4 (薩3 隅1) 宮1 (諸) クイヤンシ宮1 (諸)
 クイヤンセ鹿11 (薩8 隅3) クイヤンノ宮1 (日) クウヤン鹿1 (薩) クウヤン鹿1 (薩) クツ下熊1
 クツ下ナー熊1 クツ下ナン熊1 クツ下ノイ熊1 クテー大1 (後) コテ大1 (後) クンサイ佐14 長4 クン
 サイ佐1 クンシャイ長1 クンシャイ佐2 長2 クンデーチ長1 クンナ佐1 クンナイ福9 (豊7 前2) 長1 熊
 2 宮4 (諸1 日3) 大1 (後) クンナサイ福1 (豊) クンナツセ長3 クンナツセー長3 熊1 クンナツセ佐1
 長2 クンナツセー長1 クンナハリ熊12 クンナリ熊1 クンナンセ大1 (後) クンニヤーレ長1 クンヤシ鹿
 1 (隅) 宮3 (諸) クンヤス鹿1 (薩) クンヤンシ宮1 (諸) オ呉レ大1 (後) オクレ福11 (豊9 前2) 佐

- 1長3熊1大29 (後23前6) オクレツセ長1 オクレナサルマセ長1 (対) オクレナハリ1大1 (前) オクレ
 ナンセー長1 オクレナンへ長1 オクレマシ1大1 (後) オクレマツセ長5 オクレマツセ福1 (前) オクレ
 マツセー長4 (2巻2) オクレマツセー長1 オクリヤツセ長1 オクヤツセ長1 オクンサイ長2 オクンナハ
 イ宮1 (日)
- 遣^{ツカ}ーサイ福13 (前) 遣ーサイ福6 (前5後1) 遣サイ福1 (前) 遣ーサツセ福1 (前) 遣ーセ福1 (前)
- ツカーサイ福17 (前) ツカアサイ福3 (前) ツカハサイ福2 (前) ツカフサイ福1 (前) ツカサイ福3 (豊
 1前2) ツカーサツセ福1 (前) ツカーサツセー福1 (前) ツカーザツセー福2 (前) ツカアザツセエ福1
 (前) ツカツセ福1 (前) ツカッセー福1 (前) ツカハレー福1 (前) ツカイ福1 (前)
- タモイヤンセ鹿1 (薩) タモレ鹿1 (隅) 宮1 (諸) タモシ鹿10 (薩6隅4) タモンシ宮1 (諸) タモン
 セ鹿19 (薩11隅8) 宮1 (諸)
- ナへ長1 ナツセイ福1 (前)
- 拜領福2 (後) 熊1 ハイリョー熊1 ハイリヨ熊5 ハイヨー熊2 ハイヨウ熊2 ハイヨ熊7
- マセ長1 マツセ長1 (巻) 熊2 マツセ長1 メセ福1 (後)
- 申シツケラレマセ長1 (対) 申セツケラレマセ長1 (対)
- ヤラツセ宮1 (日) ヤリヤイ福1 (前) ヤレ福1 (前) 熊3大1 (後) ヤレー熊1 ヤレヤ熊1 ヤンシャ
 イ福1 (前) ヤンナイ福8 (前) ヤンナサイ福3 (前) ヤンナザイ福1 (前) ヤンナザツセエ福1 (前)

ヤンナシヤイ福1(前) ヤンナツセ福2(前) ヤンナツセー福2(前) ヤンナツセエ福1(前) ヤンナツセ福2(前) ヤンナツセー福2(前) ヤンナツセエ福1(前) ヤンナハイ宮1(日) ヤンナハリ熊1宮1(日)
オヤリ大1(後) ヤッテンヤイ福1(前) ヤラシカイ佐1 ヤランケ佐1 ヤラデスカ長1 ヤランナ佐1

右を概観すると

下サイ系——肥後

吳レ系——九州

遣レ系——筑前

遣ス系——筑前

賜レ系——薩摩、大隅

拜領系——肥後

仰セツケラレ系——筑後、南部肥前、壱岐

申シツケラレ系——対馬

是を地図に示したのが別表6である。

茶刷補遺質問表に

三 命令に於て 飛ブサイ の様に 動詞終止形十サイ の形式を用ひますか。

同回答表に

三 来ルサイ 又 渡リンシャイ の如く 動詞連用形十ンシャイなる形を用ひますか。

と刷込んだに對する回答模様左の通り。

○来サイ 【福】 朝 1

来ルサイ 【佐】 東松 1 杵 1 唐 1

【長】 北松 1

【熊】 玉 1 天 1

来ルサイ 【福】 糸 1 福 1

瀨 1

【佐】 佐郡 1 東松 1

【長】 北松 1

【熊】 玉 1

来ッサイ 【佐】 佐市 1

来ラサイ 【福】 朝 1

瀨 1 女 1

【大】 日 1

○渡リンシヤイ 【福】 倉 1

槽 2 糸 4 筑 2 福 3

瀝 1

【佐】 神 1 小 1 杵 4 藤 1

【長】 北高 4 北松 1

【大】 玖 1

同回答表に

四 又命令語尾用なる「見よ」を例へば 歩イテモ | の様に云ひますか。
と刷込んだに對する回答模様左の通り。

○モ 1 【福】 糟 1 朝 1 糸 3 早 1 筑 1 福 1

【佐】 佐郡 1

【長】 西彼 2

下 1

【熊】 玉 1 菊 1

○モ 【福】 糸 2

註

昭和七年九月『音声学協会々報』第27—28号「コトタマ往來」の3「数年前自分が生れて初めて関門を渡つて鹿児島本線に乗じて間も無く、車中の一老母が或駅の売子に向つて發した「蜜柑の遺さ」(蜜柑を下さい)なる語を大分後迄自分は九州方言古代要素の片影なる可き「蜜柑の司」と許り思ひ込んで居た。」(吉町)

東條操教授「本州西部の方言」(昭和九年十二月『国語科学講座』、同『方言と方言学』昭和十三年六月初版所收)によると、近畿は「クレ」系、中国四国(土佐以外)は「ツカーサイ」系が支配し、更に中国は本部区が「クレマイ」系、雲伯区が「ゴセ」系、四国は阿讃予区が「クレ」系と「イタ」系、土佐区が「オーセ」系なる事が解る。

橋正一『方言讀本』昭和十二年五月26頁には東北地方訛形が拾へ、「クレ」系「タモレ」系「下サイ」系の混交である。

奥里將建氏『四国の方言』昭和十八年八月の一—一頁「それよりも普通に「下サイ」といふ丁寧の意味の△アノ柿取ッテツカア△△△アノ筆売ッテツカと言ふ言ひ方(所に依つて多少の訛がある)が、中国方言圏は殆ど全円、四国方言圏は内海方面に汎く行はれてゐて——土佐はハイリョウ(拜領)又はトウセ——江戸時代に於ける武家言葉たる「使はされ」の遺存としても

〔下略〕

柳田国男氏『毎日の言葉』の「買物言葉」参照。

長田幹彦氏『小説天皇』では聖上が伺候者に物を賜はる時に側近者に向つて「誰々に何々を賜はれ」と仰せられる事が解る。

北九州でも「見セチャランネ」式に否定疑問形を以て希求する事が日常盛んに使用される。

昭和十五年三月『音声学協会々報』第60—61号「コトタマ往來」1021「沖繩語 imiso:re (入らっしや) や winisore (居らっしや) の「ミソレ」は「見候へ」ではなく、「召了れ」が原義なのである(伊波説仲宗根政善氏仲介)(吉町)の語

原説は金城朝永氏『那覇方言概説』昭和十九年八月の一七九—一八〇頁にも大体同意見が見えるが、金田一京助博士『国語の變遷』昭和十六年十二月初版四九頁「尤も、八重山の方の、ミソレ(「見なさい」)など『見候へ』が残つてゐる。内地では八丈島が『候ふ』の残つてゐる方言だといはれる。中世の面影を今に伝へるものといふべきである。」の前半は訂正を要する。竹田秋楼『博多仁和加集』大正三年五月初版附録「博多の方言」には「こるさい 来なされ(卑下語)」とある。

敬 助 動 詞 活 用 分 布 表 1

ヤ ス	ヤ ル	ゴ ワ ス	ゴ ア ス	ゴ ザ ス	ゴ ザ ル	ガ ッ シ ャ ル	ナ ハ ル	ナ サ ル	動 詞	
									国	縣
0	2	1	1	5	8	0	3	25	前 豊	福
0	0	4	2	36	34	6	9	46	前 筑	
0	2	0	0	2	18	1	19	36	後 筑	
0	0	1	0	4	11	1	0	36	前 肥	佐
5	3	2	1	23	9	0	16	45	前 肥	長
1	1	0	0	2	4	1	2	2	岐 若	
1	3	0	1	2	3	0	0	6	馬 対	
13	13	4	5	41	36	0	93	40	後 肥	熊
1	4	13	25	11	2	0	1	15	摩 薩	鹿
3	4	9	17	2	2	0	0	8	隅 大	
0	2	4	2	6	4	0	3	3	縣 諸	宮
0	5	0	0	2	5	0	7	11	向 日	
2	10	8	3	8	30	1	6	66	後 豊	大
0	2	0	0	1	4	0	8	8	前 豊	
26	51	46	57	145	170	10	167	347	州	九

九州方言敬讓・希求助動詞活用分布相

敬 助 動 詞 活 用 分 布 表 2

ヤ ン ス	ヤ ス	ガ ン ス	ガ ス	ナ ス	ナ ル	ラ ス	ナ ハ ル	詞 動 助		
								国	縣	
0	0	0	0	1	0	0	0	前	豊	福
0	0	0	5	9	17	1	1	前	筑	
1	0	1	0	5	0	11	4	後	筑	
1	0	0	3	1	6	5	0	前	肥	佐
2	1	2	8	12	6	23	0	前	肥	長
0	0	0	0	1	2	3	0	岐	壹	
0	0	0	0	0	0	0	0	馬	対	
0	8	1	5	19	12	36	11	後	肥	熊
0	0	0	0	1	0	1	0	摩	薩	鹿
0	0	0	1	0	1	1	0	隅	大	
0	0	0	0	0	0	0	0	縣	諸	宮
1	2	1	1	1	6	2	0	向	日	
8	0	1	0	1	2	0	0	後	豊	大
2	0	1	1	0	0	1	1	前	豊	
15	11	7	24	51	42	84	17	州		九

九州方言敬讓・希求助動詞活用分布相

表 布 分 用 活 詞 動 助 讓 敬 3

ギ ヤ ス	ギ ヤ ル	タ モ ス	タ モ ル	オ サ イ ヂ ヤ ズ	オ サ イ ヂ ヤ ル	オ ヂ ヤ ス	オ ヂ ヤ ル	詞 動 助	
								国	縣
0	2	0	0	0	0	0	0	前 豊	福
0	0	0	0	0	0	0	0	前 筑	
0	0	0	0	0	0	0	1	後 筑	
0	0	0	0	0	0	0	0	前 肥	佐
0	0	0	0	0	0	1	0	前 肥	長
0	0	0	0	0	0	0	0	岐 沓	
0	0	1	1	0	0	0	1	馬 対	
1	3	1	6	0	0	0	4	後 肥	熊
7	4	19	7	18	5	21	9	摩 薩	鹿
5	1	15	4	14	4	13	5	隅 大	
1	1	7	6	6	2	5	4	縣 諸	宮
0	0	0	0	0	0	0	1	向 日	
0	0	0	0	0	0	1	2	後 豊	大
0	0	0	0	0	0	0	0	前 豊	
14	11	43	24	38	11	41	27	州	九

九州方言敬讓・希求助詞活用分布相

表 布 分 用 活 詞 動 助 讓 敬 4

九州方言敬讓・希求助動詞活用分布相

モ ス	モ 1 ス	ス		マ		ル ス ッ マ		詞 動 助	
		マ ス セ レ ン	マ ツ ス セ レ ン	マ ツ ス セ レ ン	マ ツ ス セ レ ン	マ ツ ス セ レ ン	マ ツ ス セ レ ン	国	縣
		マ ス セ レ ン	マ ツ ス セ レ ン	マ ツ ス セ レ ン	マ ツ ス セ レ ン	マ ツ ス セ レ ン	マ ツ ス セ レ ン		
1	3	13	2	0	1	1	前	豊	福
0	4	0	23	4	3	13	前	筑	
0	1	0	3	2	1	11	後	筑	
0	4	6	4	0	0	16	前	肥	佐
1	8	8	13	2	2	6	前	肥	長
0	1	0	0	0	0	4	岐	壱	
0	2	4	0	0	0	0	馬	対	
3	20	7	28	3	1	13	後	肥	熊
18	12	0	0	0	0	0	摩	薩	鹿
13	3	0	0	1	0	0	隅	大	
3	4	1	0	0	0	0	縣	諸	宮
0	2	3	0	0	0	0	向	日	
0	17	32	1	0	0	0	後	豊	大
0	3	5	0	0	0	1	前	豊	
39	84	79	74	12	8	65	州		九

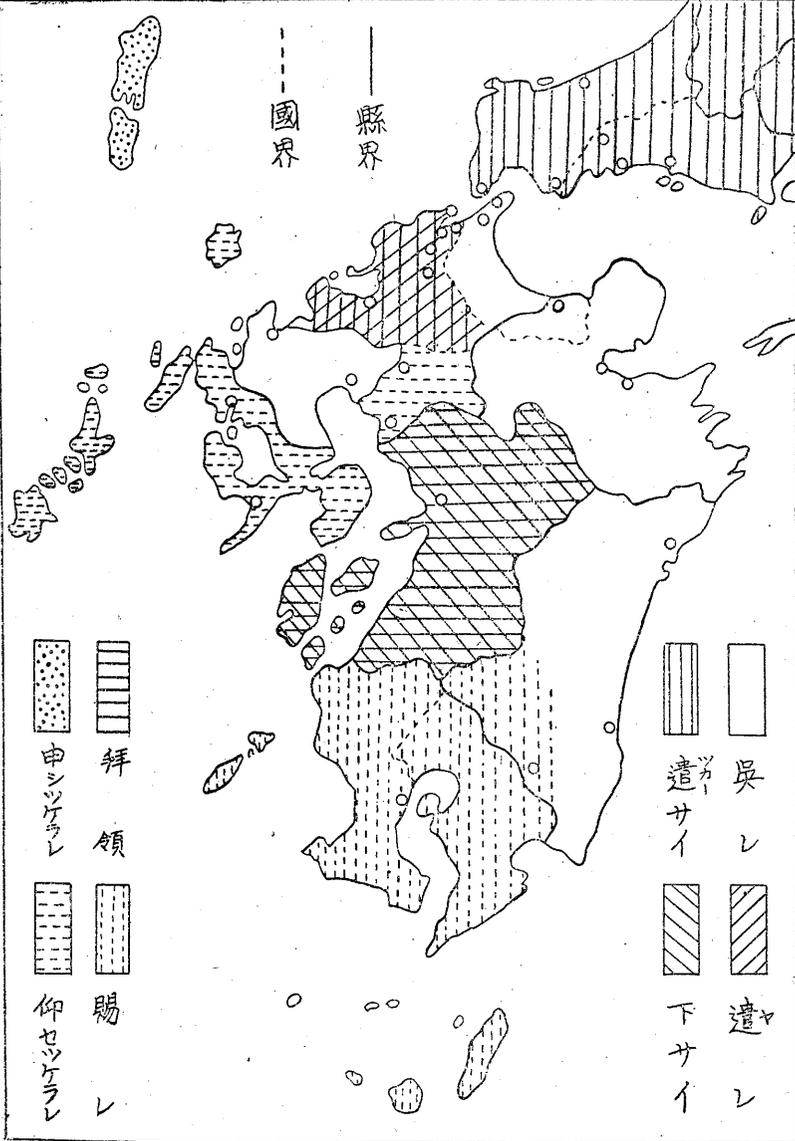
表 布 分 用 活 詞 動 助 讓 敬 5

モ ハ ン	モ サ ン	モ 1 ス	ス			マ		ル ス ッ マ		詞 動 助	
			マ マ ス セ レ ン	マ マ ッ ス セ レ ン	マ マ ッ ッ ス セ レ ン	マ マ ス セ レ ン	マ マ ッ ス セ レ ン	国	縣		
0	0	0	12	0	0	0	1	前	豊	福	
0	0	0	13	16	14	3	4	前	筑		
0	0	0	3	1	11	0	12	後	筑		
0	0	0	8	1	1	0	7	前	肥	佐	
0	0	1	14	15	8	0	5	前	肥	長	
0	0	0	0	0	2	0	3	岐	孝		
0	0	0	4	0	0	0	0	馬	対		
0	0	4	6	30	19	0	7	後	肥	熊	
2	10	4	0	0	0	0	0	摩	薩	鹿	
6	9	11	0	0	0	0	0	隅	大		
1	8	1	0	0	0	0	0	縣	諸	宮	
0	1	0	9	0	2	0	1	向	日		
0	0	0	44	0	0	0	0	後	豊	大	
0	0	0	8	0	0	0	0	前	豊		
9	28	21	121	63	57	3	40	州	九		

九州方言敬讓・希求助動詞活用分布相

九州方言敬讓・希求助動詞活用分布相

九州方言敬讓・希求助動詞活用分布相



第四十輯

一八二頁四行及一八四頁一七行

誤

統編

正

殘編